

日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 SDSS Collaboration Meeting

渡航先—アメリカ

期間—2003年9月30日～10月5日

2003年10月1日から10月4日にかけてフェルミ国立加速器研究所で行われた Sloan Digital Sky Survey (SDSS) Collaboration Meeting に参加し、「First Large Separation Lensed Quasar from the SDSS」というタイトルで口頭発表をしました。

まず、到着したのが9月30日の朝で時間があったので、共同研究者でもある Chuck Keeton 氏を訪ねてシカゴ大に行くことにしました。途中電車の駅がわからず町中をぐるぐる回るといふハプニングもありましたが、何とか昼前にたどり着きました。彼と直接会うのは今回が初めてでしたが、とてもいい人でつかの間の滞在を楽しむことができました。さらにその他のシカゴ大の人々とも挨拶をすることができて有意義な訪問になったと思います。

私の参加した会議は普通の研究集会とは少し異なり、SDSS の SDSS による SDSS のための会議といった感じで、science の発表に加えてデータ公開の web に関する話や SDSS の今後の予定といったことも発表され議論されます。特に現在では資金難からサーベイ終了時にサーベイ領域にギャップができるという問題があり、今回それが science にどのような影響を与えるかといったことを特に大規模構造の研究の見地から盛んに議論していたのが印象的でした。また、会議では plenary session のほかに各 working group の session もあり、そこではより突っ込んだ議論がなされています。

今回私が話をしたのは、SDSS を使って発見した初の大分離角重力レンズクエーサーについてで

す。これまでの重力レンズクエーサーの最大の分離角は6秒程度ですが、今回発見したのは分離角が14秒程度あり、もちろん記録を大幅に更新したことになります。幸いにも plenary session で話ができることになりました。緊張しつつ自分の順番を待っていると、何と発表の直前にこの重力レンズの発見論文の投稿先の Editor から “we can in principle offer to publish it” という吉報が届くという事件(?)が起こり、共著者である Daniel Eisenstein らと固い握手を交わしました。そんなこんなであわただしく自分の番を迎えましたが、何とか無難に発表を終えることができました。発表した内容がよかったのか、はたまた共同研究者の稲田直久氏と入れ替わり立ち替わりに発表するという斬新なスタイルが受けたのかはわかりませんが、発表後に多くの人からお褒めの言葉を頂き、大きな自信になりました。また、予定にはなかったのですが急拠重力レンズクエーサーの working group が開かれることになりました。昼食時を利用して行われたのでほんの短い時間でしたが、今後の追観測の方針について議論ができとても有意義でした。総じて私の研究を強くアピールすることができ、非常に充実した会議であったと思います。ただ、一つ残念だったのは思ったよりも忙しくて加速器を一周するという当初の目標が達成されなかったことです。

最後になりましたが、現地でお世話になった松原隆彦さん、安田直樹さん、加用一者さん、稲田直久さん、そして渡航を援助していただいた早川基金とその関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

大栗真宗 (東京大学)